

よしつねせんぼんぎくら

義経千本桜

〔解説〕

竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作。延享四年（一七四七）大坂竹本座初演。全五段の時代物。この作品は「仮名手本忠臣蔵」「菅原伝授手習鑑」と共に浄瑠璃の三大傑作とされています。義経伝説の堀川夜討ち、大物浦、吉野落ちの三事件を骨子とし、そこに壇ノ浦での平家滅亡に際して死んだとされた知盛（とももり）、維盛（これもり）、教経（のりつね）が、実は生きていて源氏に復讐しようとする筋がからまっています。

〔三段目あらすじ〕

維盛の妻子、若葉の内侍（ないし）と若君六代君（ろくだいぎみ）は、主馬小金吾（しゆめのこきんご）の供で高野を目指しますが、途中でいがみの権太に金を騙し取られてしまいます。

〈小金吾討死の段〉

内侍らに源氏の討手がかかり、小金吾は討ち死にしていますが、そこへ通りかかった鮎屋の弥左衛門が何を思ったか小金吾の首を切って持ち帰ります。

〈すしやの段〉

弥左衛門はその昔、平重盛に恩を受けた身であったため、維盛を奉公人の弥助として匿っていました。事情を

知らない娘のお里は、弥助と夫婦になることを望んでいましたが、追われた内侍と若君が鮮屋に逃げ込むと、事情を理解し、三人を逃がします。

母親に金の無心をしようと忍び込んでいた権太が褒美目当てに跡を追います。弥左衛門は討手の梶原に偽首の入った鮮桶を出しますが、その中に会ったのは権太が母親から騙し取った金でした。そこへ権太が首の入った鮮桶を梶原に差し出して、褒美の羽織を受け取りますが、激怒した弥左衛門は権太を刺します。しかし、権太は苦しい息の下で、首は小金吾のもの、内侍と若君は自分の妻子が身替わりに扮していたと父に告げるのです。そこへ現れた維盛が梶原の置いていった羽織を裂くと、中から袈裟(けさ)衣が現れて、実は頼朝もかつて重盛に助けられた恩返しに、維盛を助けるつもりであったことが判るのです。

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。

小金吾討死の段

諸共立ち帰る。

せきよう

い

夕陽西へ入る折から、主馬の小金吾武里は、上

市村にて朝方が追手の人数にんずに取り巻かれ、数ヶ所

の疵を負ひながら内侍若君御供申し、一先づ都へ

立ち帰るを、後に続いて数百人、遁さぬやらぬと

追っかけたり。手疵は負へども気は鉄石の武里が、

死に物狂ひと思ひの刃やいば、こゝに三人かしこに七

人、ばらりばらりとなぎ倒し、その身は秋の花紅

葉敵は木の葉のその後へ、追手の大将猪熊大之進、

遅ればせに駈け来たり、

「ヤア死に損ひめいづくへ行く。先頃せんころ嗟峨の奥に

て取り逃がし、主人朝方の御機嫌ほか以ての外。すご

すご館へ帰られず、庵坊あん主めに白状させ付け廻し

たるこの海道。サア維盛の御台若君を渡し、腹か

つさばけ」

と呼ばはったり。手負ひは流るゝ血汐をぐつと一

飲み息を継ぎ、

「主馬の判官が倅せがれ小金吾武里、息ある中うちはいっ

かないかな」

「ヲその一言いちごころが絶命」

と、踊り上がって討つ太刀を、てうど請け止めは

つしと跳ね、ひらりと見せてはくるりとはづし、

手練を尽くせどさすがは手負ひ。内侍若君あぶあ

ぶひやひや、小石を拾ひ砂打ち付け、及び腰なる

加勢も念力。手強ていぢく見ゆる猪熊が眼まなこに入つて目

あては暗闇、透間に切り込むだんびらに、眉間を

割られて頭転倒ずでんてう、乗つかゝるを下よりも突く、

銚ちやうはあばら骨、金吾ものつけに反り返る。あな

たが起きれば石礫、猪熊切られ小金吾も、ともに深手の四苦八苦修羅の衢ぞ危ふけれ。忠義の天成小金吾が、難なく相手を取って押さへ、ぐつと突つ込む止めの刀。

「サア仕負ほせし嬉しや」

と、思ふ心のたるみにや、『うん』とその身も倒れ伏す。

「ノウ悲しや」

と内侍若君いたはりかゝへ抱き起こし、

「コレのお金吾、金吾いのふ。気をはつきりと持ったも。そなたが死んで自らや、この子は何となるものぞ。情なや悲しや」

と、泣き入り給ふ御声の、耳に通つて顔振り上げ、

「ヲ、内侍様六台様、あきらめて下さりませ。心は弥猛にはやれども、もふ叶はぬ。コレ申し若君

様、今際のきはに金吾めが申す事、よふお聞き遊

ばせや。我が君維盛様は、かねて御出家のお望み。

熊野浦にて逢ひ奉りしと云ふ者ある故、高野山へ

と志し、お二方をお供したれど、なかなかこの手

では一足も行かれず。お前様は、御台様を伴ひ神

谷の宿といふ所に、内侍様を残し置き、人を頼

んで山へ登り、『とゝ様のお名は云はれぬ。今道

心の御出家』と、尋ねてお逢ひ遊ばせ。西も東も

敵の中、平家の御公達と悟られぬ様、お命めでた

う御成人の後、憚りながら金吾めが事、思し召し

出だされなば、一滴の水、一枝の花、それが即ち

冥途へ御知行。御成長待つております。エ、お名

残惜しいお別れ」

と、云ふもせつなき息遣ひ。六代君は取り纏り、

「死んでくれな小金吾。そちが死ぬるととゝ様に

逢ふ事がならぬは」

と、泣き入り給へば内侍はせき上げ、

「アレ聞いてたも子心でも、そなた一人を力にする。『維盛様に逢ふまでは死ぬまいぞ死ぬまいぞ』

と、なぜ思ふてはたもらぬ。御一門残らず亡び、広い世界を敵に持ち、いつまで永らへ居られふぞ。

ともに殺してたもいの」

と嘆き給へば、『ことほり』と、手負ひはいとゞ涙にくれ、

「先君小松の重盛様は日本の聖人、若君様はその孫君。諸神諸菩薩の恵みのない事はござりますま

い。末頼みに思し召して、必ず短気をお出しなされな。あれあれ、向ふへ提灯の灯影ひかげ、又も追手の来たるも知れず。若君伴ひ、この場を早く早く」

「イヤイヤ深手のそなたを見捨て置いて、いづく

を当てに行くものぞ。死なば共に」

と座し給へば、「へエ、ふがひない、六台様は大事にないか。この手で死ぬる金吾めではござりませぬ。聞き入れなければ直すくに切腹」

「ア、コレ待つてたも。それ程にまで思やるなら、成程先へ落ちませう。必ず死んでたもるなや」

「お氣遣ひ遊ばすな。運に叶ひ後より参ろ」
「必ず待つて居るぞや」

と、云ふ間に近付く提灯の、灯影に恐れ是非なくも、若君連れて落ち給ふ、御心根ぞいたはしき。手負ひは御後見送り見送り、

「死なぬと申せしは偽り。三千世界の運借つても、何のこの手で生きられませふ。内侍様、六台様、これがこの世のお別れでござります」

と、思ふ心も断末魔、知死期も六つの暮過ぎて、

朝の露と消へにける。程なく来たる提灯はこの
村の五人組、何やらぎはぎは話し合ひ、山坂の別
れ途に庄屋作が立ち留まり、

「コレ弥助の弥左衛門殿、貴様は鮎商売故、念押
す上に押しかける。今云ひ付けた鎌倉の侍は、聞
き及んだ蚰蜒げげじ。何やらこなたの耳をねぶつて禿はげ
程云ひ付けたら、『畏まった畏まった』と滅多無
性に請け合ふたが、何と覚えのある事かや」

「ハテ知れた事。こなた衆も常からおれが性根を
知らぬか。血を分けた俸でも見限つたら門端も踏
まさぬ弥左衛門。膝ぶしが砕けても、畏まつたら
痺れも切らさぬ。したが後からの云ひ付けがもつ
けの幸ひ。嗟峨の奥から逃げて来た、子を連れた
女おなこと大前髪、この村へ入り込んだと追手からの
知らせ。ところで蚰げじ殿がねぶりかけて、捕へたら

褒美とある。こりや又格別よい仕事。皆も油断を
せまいぞや」

「ヲそれぞれ、こんな時こなたの息子の、いがみ
の権太郎さんを頼んで置かふ」と五人組、山道行
けば弥左衛門、坂へおりしも行先の手負ひにばっ
たり行き当たり、『はっ』と飛び退き、気味悪な
がら提灯振り上げそろそろ立ち寄り、

「テモマむごたらしう切つたは切つたは。旅人そ
ふなが、追剥おいはぎの所為しわざならば丸裸にしそふなもの。
路銀を当てに悪者の所為か」

と、悪い子を持つ親の身は、案じ過ごして

「コレコレ手負ひ殿手負ひ殿」

と、呼ぶも答えもなき骸からに、

「さては最早息絶えたか。ア、いとしやいづくの
人なるぞ。見ればふけた角前髪すみ。袖振り合ふも他

生の縁。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀、南無阿弥陀
仏」

と回向して、

「とかく浮世は老少不定ふじょう、哀れを見るも仏の異見。
人はいがまず真まことつ直ぐに、後生の程が大事ぞ」
と、思ひ続けて行き過ぎしが、何思ひけん立ち留
まり、取つつ置にわかいつの俄の思案。そろりそろり
と立ち戻り、あたり見廻し見廻して、抜き身を拾
ひ取るより早く、死に首はつしと打ち落とし、提
灯吹き消し首引つ提げ、『忝かたじけない』と弥左衛門、
すぐなる道も横飛びに、我が家をさして

(立ち帰る。)

すしやの段

神ならず仏ならねばそれども知らぬ道をば行
き迷ふ、若葉の内侍は若君を宿ある方へ預け置き、
『手負のことも頼まん』と思ひ寄る身も緑の端、こ
の家を見かけ戸を打ち叩き、

「一夜の宿」

と乞ひ給へば、維盛はよい退きしほと表の方、叩く
とほそ
枢とほそに声を寄せ、

「この内は鮓商売、宿屋ではござらぬ」

と、愛想のないが愛想となり。

「イヤこれ申し、稚きを連れた旅の女、是非に一夜」
と宣ふにぞ、

「断り言ふて帰さん」

と戸を押し開き月影に、見れば内侍と六代君、『ハ

ツ』と戸を鎖し内の様子、娘の手前もいぶかしく、
そろ／＼立ち寄り見給へば、早くも結ぶ夢の体、表
に内侍は不思議の思ひ、

「今のはどふやらわが夫に、似たと思へど形容、
つむりも青き下男、よもや」

と思ひ給ふ内、戸を押し開いて維盛卿、

「若葉の内侍か、六代か」

と、宣ふ声に、

「ヒヤア、さてはわが夫」

「父様か」

「ノウなつかしや」

と取り継り、詞はなくて三人は、泣くより他の事ぞ
なき。

「まづまづ内へ」

と密かに伴ひ、

「今宵は取り分け都の事、思ひ暮してゐたりしが、
親子共に息災で不思議の対面、さりながら某この家
にゐる事を、誰が知らせしぞ殊にまた、遙々の旅の
空、供連れぬも心得ず」

と、尋ね給へば若葉の君、

「都でお別れ申してより、須磨や八島の軍を案じ、
一門残らず討死と聞く悲しさも嗟峨の奥、泣いてば
つかり暮らせしに、高野とやらんにおはするといふ
者のある故に、小金吾召し連れお行方を心ざす道追
手に出合ひ、可愛や金吾は深手の別れ、頼みも力も
ない中に、廻り逢ふたは嬉しいが、三位中将維盛様
がこのお姿は何事ぞ。袖のないこの羽織に、このお
つむりは」

と取り付いて、咽び絶へ入り給ふにぞ。面目なさに
維盛も、額に手を当て袖を当て、伏し沈みてぞおは

します。

涙の内にも若葉の君、伏したる娘に目を付け給ひ、

「若い女中の寝入端ねいりばな、殊に枕も二つあり、定めてお

伽の人ならん。かくゆるかしきお暮らしなら、都の

事も思し召し、風の便りもあるべきに、打ち捨て給

ふは胴慾」

と恨み給へば、

「ホ、オそれも心にかゝりしかど、文の落ち散る恐

れあり。わけてこの家の弥左衛門、父重盛の恩報じ

と、われを助けてこれまでに、重々厚き夫婦が情け。

何がな一礼返礼と思ふ折柄娘の恋路、つれなく言

はゞ過ちあらん。かへつて恩が仇なりと、仮の契り

は結べども、女は嫉妬に大事も洩すと、弥左衛門に

も口留して、わが身の上は明さず、仇な枕も親共へ、

義理にこれまで契りし」

と、語り給へば伏したる娘、堪へ兼ねしか声上げて、

「わつ」

とばかりに泣き出す。

「コハなに故」

と驚く内侍、若君引き連れ逃げ退かんとし給へば、

「ノウこれお待ち下され」

と、内侍と共にお里は駆け寄り、

「まづ／＼これへ」

と内侍若君上座しよざへ直し、

「私は里と申してこの家の娘。いたづら者憎い奴と、

思ひ召されん申し訳。過ぎつる春の頃、色珍しい草

中へ、絵にある様な殿御のお出で、維盛様とは露知

らず女の浅い心から、可愛らしいと思はしいと思

ひ染めたが恋のもと。父も聞こえず母様も、夢にも

知らして下さつたら、たとへ焦がれて死ぬればとて、

雲居に近き御方へ、鮎屋の娘が惚れられふか。一生連れ添ふ殿御ぢやと、思ひ込んでゐるものを、二世の固めは叶はぬ、親への義理に契つたとは、情ないお情に預かりました」

とどうどと伏し、身を震はして泣きければ。維盛卿は気の毒の、内侍も道理の詫び涙、乾く間もなき折からに。

村の役人駆け来たり戸を叩いて、

「ア、コレ、こゝへ梶原様が見へます。内掃除しておかれい」

と言ひ捨て、立ち帰る。人々『ハツ』と泣く目も晴れ、

「いかゞはせん」

と俄かの仰天、お里は早速に心付き、

「まづ、親の隠居屋敷上市村へ」

と気をあせる、

「げにその事は弥左衛門、われにも教へ置きしかど、最早や開かぬ平家の運命、検使を引き受け潔ふ腹搔き切らん」

と身拵へ、内侍は悲しく、

「コレ、この若のいたいけ盛けを思し召し、ひとまづこゝを」

と無理矢理に引立て給へば維盛も、子に引かさるゝ後ろ髪、是非なくその場を落ち給ふ、御運の程ぞ危ふけれ。

様子を聞いたかみがみの権太、勝手口より躍り出で、「お触れのあつた内侍六代、維盛弥助めせしめてくれん」

と尻引つからげ駆け出すを、

「コレ待つて」

とお里は取り付き、

「兄様、これは一生の私が願ひ、見赦して下さい」

と、頼めど聞かず勿ね飛ばし、

「大金になる大仕事、邪魔ひろぐな」

と縦るを蹴倒し張り飛ばし、最前置きし銀かねの鮓桶、

「これ忘れては」

と引提げて跡を慕ふて、迫ふて行く。

「ノウとゝ様、かゝ様」

とお里が呼ぶ声弥左衛門、母も駆け出で、

「何事」

と問へば娘は、

「コレくくく、都から維盛様の御台若君、尋ねさ

迷ひお出であり。積もる話のその中へ詮議に来ると

知らせを聞き、三人連れで上市へ落としましたを情

ない。兄様が開いてみて討ち取るか生け捕つて」

と、言ふよりびつくり弥左衛門、

「ソレ一大事」

と嗜みの、朱鞘の脇差腰にぼつ込み駆け出す向ふへ、

「ハイくくく」

と矢筈の提灯梶原平三景時、家米数多あまたに十手持たせ、

道を塞いで、

「ヤア老ぼれめ、いづくへ行く。逃ぐるると逃がさ

ふか」

と、追取り巻かれて『ハッ』と吐胸、

「先も気遣ひ、こゝも遁れず」

七転八倒心は早鐘、時に時つく如くなり。